南の国のナデシコ税理士

成功へのキセキ

第8回 私の子育て…ただしオトコの子限定

川崎の事件…。

ニュース画面を見るのも辛い事件ですが、今回はオトコの子をもつ母親として、思ったことを書いてみようと思います。被害者のお母様がコメントを発表し、「自分が朝早くから、夜遅くまで働いていたために、コドモが日中何をしているか、把握できなかった」ことを悔いていらっしゃいます。「母親の不在」に後ろめたさを感じないワーキング・マザーなど、この世に存在する訳がありません。このお母様が、いまどれだけ自分を責めているかと思うと、胸が張り裂けそうです。

しかし世の中はすべて結果論です。あの時こうしていれば良かった、あんな事をしなければ良かった…と、事件が起きた後なら、いくらでも後悔することができます。こんな最悪の結末がくると分かっていたら、誰しも全力で、その結末を避ける努力をしたことでしょう。

何も悪いことが起きなかったとき、私たち凡人には、それを避ける努力をしたから、その結果として何も起きなかったのかを検証する術がありません。そんな努力をしようがしまいが関係なく、ハナから何のトラブルも起きなかったかもしれない。「私がこういう努力をしたおかげで、問題が回避できたのだ」と主張しても、人生は一度きりなので、別の選択肢をとった場合と、比較のしようがないからです。

今でも事件現場には、献花に訪れる人が後を絶たないようです。「あの時こうしておけばよかった…。」誰もが、心に何らかの後悔を抱えているからではないでしょうか。

子育てとは、不確実で、頼りないものです。以前にもこのエッセイで書きましたが、ビジネスが「乾燥ワカメ」なら、子育ては「生鮮食品」です。問題を放置していても、後からお湯をかければ、ビジネスなら復活させることができる。でも子育ては、そうはいきません。その瞬間に手をかけて「調理」をしなければ、二度と元には戻れないのです。子育ての間、私の最大のミッションは、コドモを「死なせないこと」だと思っていました。外出のとき、決してコドモの手を離さない。いつどんな時でもコドモから目を離さない。あらゆるリスクからコドモを守るのが、母親の使命だと。

それにしても、不思議なのは、ボコボコに殴られても、被害者の子の方からまた、遊びましょうと、仲間にLINEしていることです。大学院生のムスコに、その心理がわかる？と聞いたら、なんでそんなこと聞くの？と不思議がられましたが、ややあって「うん、わかる」と答えました。

他に居場所がなかったら、やっぱりそこを離れられないんだよ。ひどい目にあったとしても、一人ぼっちよりは、いいからね。

よい仲間たちと「つるんで」欲しいというのは、母親なら誰しも思うことでしょう。とくに朝から晩まで、髪を振り乱して働いていると、コドモが誰と遊んでいるかは、子育てのなかで非常に重要なウエイトをしめます。中学・高校に進むと、電車通学するようになったので、その分行動半径が拡がり、コドモの昼間の行動は、まったく見えなくなってしまいました。

悪い仲間とくっついて、勉強しなくなったり、ゲームセンターに入り浸ったり、繁華街をうろついたり…。または学校でいじめられたり、学校をサボったりしていないだろうか…。

そんな不安が常に、頭をよぎります。母親にできるのは、ただコドモを信頼することだけ。コドモは親とは別の人格をもち、別の意思をもち、別の感情をもって行動します。24時間、コドモの後をついて歩くことはできないし、もしできたとしても、彼らが親の思い通りに動いてくれるはずもありません。

ムスコの「はじめての試練」は、幼稚園に入園した、最初の数日で訪れました。毎日、頬にひっかき傷をつくって帰ってくるのです。幼稚園の先生に伺うと、ボスキャラ（？）の男の子が、ムスコが教室に入るやいなや毎朝、ひっかいてくるらしいということがわかりました。

はじめての幼稚園。コドモにとっても、新米ママにとっても緊張の季節です。幼稚園というはじめての社会生活で、生きる術は、ムスコ自身でつかみとらなければなりません。母親の私は、何もしてあげることができないのです。

そこで、私は１つの仮説をたてました。オトコの子にとっては「勝ち負け」が大切で、居心地の良さを決めるというものです。高校から大学までを共学、しかも女子率５％ぐらいの、男子社会で過ごした私が、オトコの子を見ていて、いつも感じていたことです。

私は次の３つのことに気をつけることにしました。

① 子供の靴は機能重視。とくに着脱が簡単にできるかどうか。
② 幼稚園（学校）に、朝早く（始業より最低30分早く）送り出す。
③ 友だちとは、ウチで遊ぶように仕向ける。

①番のポイントは、スピードです。休み時間や給食のあと、他の子よりも早く園庭や校庭に飛び出して、行きたい場所に行けるか、自分の遊びたい場所がとれるか、これはオトコの子にとっては、とても重要な問題です。

②番のポイントは、場づくりです。友だちより早く幼稚園や学校に行って、自分の「場」がつくれるか、他の子がつくった場に後から入っていかなければならないかで、オトコの子たちの力関係は決まると思います。

③番目のポイントは、マーキングです。

え、「マーキング」？

そう、ワンコがよくやるあのマーキングです（笑）。自分の「場所」に友だちを迎え入れ、自分のニオイのついたおもちゃを貸してあげれば、コドモは嫌でも居心地のよい場づくりをすることができるのです。平日は働いていたので、小学校の間は、土日にしか呼べませんでしたが、私もコドモたちと鬼ごっこをしたり、サッカーやバスケットをして楽しませてもらいました。

中学・高校になると、学校帰りに友だちを家に連れてくるようになり、時には泊まっていくこともありました。高校生ともなると、だんだん友だちの顔と名前が一致しなくなるのですが、自宅で遊んでくれれば、どんな子たちと遊んでいるかが分かって、安心できるのもメリットの１つです。

ムスコのひっかき傷は、しばらくしてなくなりました。幼稚園の先生が観察していると、毎朝、ムスコの方から、「おはよう」と、その子に手を差し伸べて声をかけ始めたとか。そして２週間目に、ついに相手の男の子が、握手を返してきたそうです。

親や先生にできることは、何１つありません。３歳のムスコが、自力で問題を解決するしかないのです。

子育てにあたっては、多くの母親と同じように、本もよく読みました。シュタイナー理論は、幼稚園の頃から勉強し、私の子育ての基本になっています。正確な年齢は忘れましたが（汗）、コドモとの関わり方について、３歳までは聖職者たれ、10歳までは芸術家たれ、18歳までは学者たれ、というものです。

「聖職者たれ」とは、小さなうちは、人生の基本、善いことと悪いことをきちんと教えなさいという意味です。とくにこの頃のコドモは、まだ空想と現実の世界の区別がついていないのだそうです。

「芸術家たれ」とは、コドモの感性を育てなさいという意味です。この時期は知識を覚えるのではなく、想像力を鍛える時期だというものです。シュタイナー教育は、アメリカ式の早期教育とは真反対の考え方ですが、私には共感できる部分が多かったように思います。

「学者たれ」とは、この頃になるとコドモは世界の不思議に、科学的な疑問をいだくようになるからです。人生の悩みや非条理などに答えられるよう、親も理論武装しなければなりません。

オトコの子の「反抗期」について、経験者である高校時代の男の同級生にインタビューしたこともあります。彼らから、「その時期は、お母さんと話すのもイヤになるけど、決して嫌いになる訳じゃないよ。お母さんのことは、やっぱり好きなんだよ」と聞いて、安心できたのもよかったと思います。

日本では、まだまだ子育ての責任は、母親にあります。うまくいって当たり前。問題がおきたら、母親のせい。とくにワーキング・マザーの場合、何かあったらそれ見たことかと、非難されます。ある専業主婦のママから、「うちは共稼ぎのお子さんとは遊ばせない方針なので、うちの子を誘わないでください」と言われたこともありました。

仕事のプレッシャー、
子育てのプレッシャー、

昔のように、支えてくれるおじいちゃんやおばあちゃん、近所の人もいません。働く母親は、近くにママ友もいないので、たった一人で不安と闘わなくてはならないのです。

それでも私は、仕事を続けてきて、よかったと思います。仕事や付き合いにかまけて、ちっともいい母親でなかったのに、コドモは勝手に大きく成長してくれました。税理士という、時間に自由がきく職業だったのもラッキーだったのかもしれません。

今回、当たり前の今の生活が、とても恵まれたものであることに気づかされた川崎の事件でした。

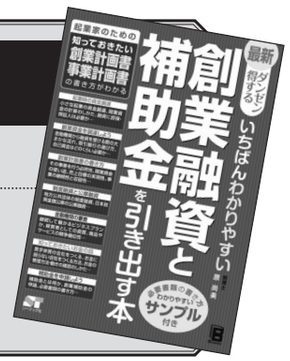
亡くなった13歳のコドモの冥福を、心から祈ります。彼の短い人生が幸せだったことを願って。

◆筆者 原 尚美（はら なおみ）プロフィール

税理士。東京外国語大学卒業。TACの全日本答練（現：全国公開模試）「財務諸表論」「法人税法」を全国1位の成績で、税理士試験に合格。直後に出産。育児と両立させるため、1日3時間だけの会計事務所からスタートし、現在は全員女性だけのスタッフ30名、一部上場企業の子会社やグローバル企業の日本子会社などをクライアントにもつ。ミャンマーに会計サービスの会社を設立し、海外進出支援にも力を入れている。著書に『小さな会社のための総務・経理の仕事がわかる本』『小さな起業のファイナンス』（いずれもソーテック社）、『51の質問に答えるだけですぐできる「事業計画書」のつくり方（日本実業出版社）』『トコトンわかる株式会社のつくり方（新星出版社）』『世界一ラクにできる確定申告（技術評論社）』『一生食っていくための士業の営業術（中経出版）』など。その他、「経理ウーマン」「デイの経営と運営」など雑誌への寄稿や、商工会議所、中小企業投資育成株式会社、日本政策金融公庫などでの、セミナー実績も多数。

新刊発売中

ダンゼン得する いちばんわかりやすい
創業融資と補助金を引き出す本

原 尚美 著（ソーテック社）　1,480円+税

創業融資と補助金をガッツリ引き出すための本です。ミャンマーに会計サービスの会社をつくって1年。法律も習慣も違う国で、大変なこと、ツラいことはたくさんあるけれど、それでもいま心から思います。起業は楽しい!この楽しさを、皆と分かち合いたい。そのためのノウハウを伝えたい。そんな思いから、起業時の資金調達について、書かせていただきました。コネもない、知識もない、資金もない、でもアイディアと情熱だけは、誰にも負けない!という人に読んでいただきたい本です。